

「戦争と医の倫理」の 日独における検証の歴史 —国際シンポジウム開催



西山勝夫・原 文夫



2012年11月17日の国際シンポジウム

旧日本陸軍が中国東北部のハルビン市近郊に組織した「731部隊」やドイツの「強制収容所」などで、人命を守るべき医師・医学者たちが犯した過ちを、戦後、それぞれでどのように検証し、今日の医学教育や医の倫理に活かしてきたのかを問う国際シンポジウム「戦争と医の倫理—ドイツと日本の検証史の比較—」が、「戦争と医の倫理」の検証を進める会（以下、進める会）の主催で、2012年11

キーワード：戦争医学犯罪（medical war crimes）、医の倫理（medical ethics）、生命倫理（bioethics）、731部隊（Unit 731）、ナチス（the Nazis）

月17日（土）午後、京都大学の百周年記念ホールで行われた。

当日は、あいにく激しい雨に見舞われたが、近畿圏以外からの方もふくめ、261人が参加した。

シンポジウムは小島莊明（東大医学部名誉教授）と川嶋みどり（日赤看護大名誉教授）の座長で、パネリストとして、ドイツからはティル・バスティアン（核戦争防止国際医師会議の元ドイツ支部長・精神科医・作家、急病のためドイツからネット回線参加）、日本からは刈田啓史郎（元東北大歯学部教授・医師・生理学者、15年戦争と日本の医学医療研究会幹事長、日本科学者会議宮城支部常任幹事）が報告を行った。また、ドイツのフリードリヒ・エーベルト財団（FES）日本代表、上智大学国際教養学部准教授のサラ・スヴェン氏が特別報告を行い、会場からの質問にも答えて意見を交わした。

1 総括に取り組むドイツ、沈黙の日本医師会・日本医学会

『恐ろしい医師たち—ナチ時代の医師の犯罪』（かもがわ出版、2005）などの著書のあるバスティアン氏は、2010年7月のドイツ医師会報では、長年ドイツ連邦医師会会長を務めたスヴェリングの死去が報じられ、現職のドイツ連邦医師会会長がスヴェリングを「治療行為の倫理的規範を守ることに功績があった」と讃えたが、



731部隊に関するビデオを見る

スヴェリングはれっきとした元ナチ党員で、障害者や病弱者の「安楽死」に関与してきたことが明らかにされていたことなどを告発し、ドイツにおいても医師・医学者、医学界・医療界における過去の総括がまだ道半ばであると述べた。

刈田氏は、731部隊で生体実験などを行った医師・医学者たちは、戦後、アメリカとの取引ですべて免責され、731部隊の中核部にいた多くの医学者が戦後のわが国の医学界・医療界で指導的地位についてきたこと、医学界の中心的役割を担っている日本医学会も、また4年に1度開催してきたこれまでの日本医学会総会でも、自らの戦争加担の問題などにはいっさい言及してこなかった事実を指摘し、「タブーを抱えて医のモラルの低下をもたらした」と批判した。

一方、ドイツでは、2010年11月に、ドイツ精神医学精神療法神経学会（ドイツでの略称：DGPPN）が、ナチス時代に精神科医によって死に追いやられた25万人以上の精神障害者について謝罪を表明し、会長による追悼講演が行われたこと、さらに2012年5月にニュルンベルグで行われたドイツ医師会大会で「私たちは、ナチ時代の医学の犯罪行為に対して医者が重大な共同責任を負うことを認める」「医者が……さまざまな人権侵害の罪を犯したことに対して、われわれは深い遺憾の意を表す……被害者およびそのご子孫のことを思い起こし、許しを乞う」

との声明を発表していることなどを刈田氏は紹介し、日本の医学会や医師会が、かつての戦争医学犯罪を検証することを強く求めた。

また刈田氏は、医師会や医学会が沈黙を守るなかで、1995年、大阪府保険医協会は、日本の医師団体として初めて731部隊の医学犯罪と、それを生んだ日本の医学界の責任に言及する声明を発表していることを紹介し、これまでいくつかの医師・医学者の団体が独自に戦争への加担と戦争医学犯罪の総括を行っていることにも言及した。

ドイツと日本がどのように戦後の歴史と戦争責任に向き合ってきたかに10年以上取り組み、『21世紀初頭の日本における歴史教育の取り組み—政治、回想録、パブリックオピニオン』の著書もあるサーラ・スヴェン氏は、日本国憲法の前文と第1条では、主権は国民にあることが明確に謳われており、選挙を通じて国会へという手順で、日本国民は過去の戦争責任に対する政府の姿勢に影響を及ぼすことができると指摘。本日のシンポジウムや展示会を行う意義は大きいと述べた。

シンポでは最後に、「医学者・医師の戦争加担についての公式の検証と反省を日本医学会に要請する—2012年京都『戦争と医の倫理』の検証を進める宣言」を採択して閉会した。



パネルを見る人たち

2 パネル展示に300人

進める会が国際シンポジウムと連動して、11

月16日(金)から21日(水)まで京都大学国際交流ホールで取り組んだパネル展示「戦争と医の倫理」には、のべ300人の来場があった。

会場では、わが国の医師・医学者、医学界・医療界による過去の戦争への加担、731部隊での医学犯罪の事実を検証する120枚余のパネル展示・パネル集販売と、731部隊などに関するDVD上映が行われた。

来館者のアンケートには、「このような展示を京都大学で開催した意義は大きい。全国各地で開催し、医の倫理の発展に生かしてほしい」などの感想や意見が多数記されていた。

3 日本医学会会長、総会会頭などに要請

日本医学会の高久史磨会長は、進める会の要請に応じ、10月19日、京都市にて筆者、住江憲勇事務局長(全国保険医団体連合会会長)、京都府保険医協会垣田さち子副理事長などの関係者が面談し、2015年に京都を中心に開催される第29回日本医学会総会で、かつての戦争と日本の医学・医療界の関わりを真摯に振り返って

検証し、その教訓を明らかにする企画を加えることなどの要請を受けた。

高久会長は、医学会会長には医学会総会の内容に関する権限がないので、次期日本医学会総会の井村裕夫会頭(元京都大学総長)に要請があったことを伝える、と応じた。

井村会頭は、11月19日に、次期日本医学会総会事務局において面談に応じ、進める会からの要請を受けた。

これにも筆者と住江事務局長、京都府保険医協会の関浩理事長などが参加し、医学会総会側は中村泰三事務局長も同席して1時間ほど意見交換を行った。

要請に対して井村会頭は、総会の主な企画を検討するプログラム委員会にはかり検討する、と応じた。

(にしやま・かつお:「戦争と医の倫理」の検証を進める会代表世話人, 滋賀医科大学名誉教授, 滋賀支部)

(はら・ふみお:「戦争と医の倫理」の検証を進める会事務局, 大阪府保険医協会事務局参与)

医学者・医師の戦争加担についての公式の検証と反省を日本医学会に要請する 2012年京都「戦争と医の倫理」の検証を進める宣言

第28回日本医学会総会が、2011年の4月2日から4月10日にかけて東京で、「いのちと地球の未来をひらく医学・医療—理解・信頼—そして発展—」のメインテーマのもとで、「医療従事者のみならず一般市民にも開かれた議論の場」として、企画されました。同総会は、「日本医学会が日本医師会と協力して医学および医学関連領域の進歩・発展を図り、学術面、実践面から医学・医療における重要課題を総合的に討議することを目的とする」としていました。

私たちは、同総会において、「医学者・医師の戦争加担」について明治35年に始まった日本

医学会が自らの検証課題として企画されるよう再々要請しましたが、残念ながら実現にまでは至りませんでした。

最近の医学・医療の進歩発展は著しく、人類は新たな倫理的問題に直面しています。医学者・医師も自らの問題としてその解決を求められています。その取り組みに際して、医学・医療のこれまでの歩みを真摯に振り返ることは「医療従事者のみならず一般市民にも開かれた議論の場」における不可欠な重要課題ではないでしょうか。

かつての戦争時の資料の焼却、散逸と残された資料の「未公開」「隠蔽」のために、戦争加担

の全貌は未だに明らかではなく、検証は容易ではありません。731部隊に関しては、当時日本を占領したGHQ（連合軍総司令部）は、関係した多くの医学者・医師に対する訊問をしましたが、その研究成果を得るために戦争医学犯罪を不問とする取引をしました。

戦後、日本医学会が置かれた日本医師会は、1951年の世界医師会加盟にあたり、「日本の医師を代表する日本医師会は此の機会に、戦時中に敵国人に対して行った暴行を非難し、また行われたと主張され、そして2、3の場合には実際行われたという患者の虐待行為をとがむ（日本医師会雑誌第26巻、71頁、1951年）」と声明し、問題は解決済みとしてきました。これは、日本の医学者・医師の戦争中の行為を真摯に反省し、その後目指すべき医療（人間の救命、健康の維持・回復・促進）、人権擁護、人種差別の根絶、人間の尊厳を基調とした日本の医学・医療のあり方を示したものと、到底いえません。このような日本の医学会（界）の風土は、戦後繰り返されてきた数々の医療事故・医療過誤や薬害において幾多の人々が犠牲になったことと決して無縁ではないと批判されてきました。その後も、日本の医学会（界）は、戦時中の医学者・医師による非人道的行為に真摯に向き合い教訓を活かす取り組みをしないまま、日本は21世紀を迎えました。

「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在も見えなくなる（ワイツゼッカー、1985年）」という歴史の教訓に沿い、ナチス時代に精神科医によって死に追いやられた25万人以上の精神障害者について謝罪を表明し、会長による追悼講演がなされたドイツ精神医学精神療法神経学会（2010年11月）や「様々な人権侵害の罪を犯したことに対して、我々は深い遺憾の意を表しナチ医学の犠牲者に許しを乞う」宣言を行ったドイツ医師会総会（2012年5月）などに学び、かつての戦争における日本の医学者・医師の非

人道的行為について、史実を明らかにし、検証を進めることは、医の倫理の確立やこれからの医学・医療のために不可欠です。その際、日本の医学界・医療界を代表する日本医学会、日本医師会や関わった学会・大学などが自らの問題として取り組むことは欠かせません。

第28回日本医学会総会も「過去に目を閉ざす」ことから未だ抜け切れませんでした。当会は、このことを残念に思い、力が及ばなかったことを被害者の方々にお詫びします。しかし、当会は、手をこまねることなく、期を同じく東京において、「戦争と医学」を検証する展示とドイツからパネリストの参加も得て全国の医学者・医師らと共に考え討論する国際シンポジウムを独自に企画しました。この企画は2011年3月11日に起きた東日本大震災と原子力発電所事故のため中止しました。当会は、その後もこの企画について、2015年に京都で開催される第29回日本医学会総会を見据えて検討を重ね、石井四郎731部隊長や多くの部隊員と関係のあった京都大学で実現しました。私たちはこの企画を通じて、「戦争と医学」を真正面からとらえ直す意義をあらためて確認しました。

全国の大学などが歴史検証に基づく徹底した医の倫理の教育を行うこと、各医学会が学会のあり方に対する検証・反省を行うこと、そして第29回日本医学会総会においては、日本医学会（総）会自らがかつての戦争に日本の医学会・医師会が加担したことや、日本の医学者・医師により行われた人道に反する残虐な「人体実験」「生体解剖」等に向きあう企画をされることを要請します。私たちは、今後もこの問題を追究し、その教訓がこれからの医学・医療にいかされるように努めます。

2012年11月

「戦争と医の倫理」の検証を進める会